

浅間山天明噴火のさいの軽井沢宿の混乱

美齊津家所蔵のこの絵図は、1783年（天明3）の浅間山大噴火のさい、山頂火口から南東へ12kmほど離れた軽井沢宿（現在の旧軽井沢）に焼け石が降りそそぎ、人びとが狼狽して逃げまどうありさまを描いたものである。

この年、浅間山の活動は5月9日（新暦）に始まり、いったんは小康状態になったものの、6月下旬から爆発的な噴火を繰り返すようになり、8月2日からは、いよいよ大噴火となった。

翌3日の午後になると、黒煙は空をおおい、おびただしい焼け石が山腹に落下して草木が燃え、遠望すると、あたかも数万の松明を栈道に並べたようであったという。

8月4日の夕刻から、活動はますます激しさを増した。このとき、軽井沢の宿に大量の焼け石が降りそそいできたのである。屋根に落下した焼け石は、たちまち火を発して火災となった。噴石に打たれて即死する者もでた。

この事態に、宿場は大混乱となった。その状況が、『浅間記』には次のように記されている。

「提灯、松明にて家財を牛馬につくるあり、戸板をかつぎ、桶、摺鉢を頭に戴きて逃ぐるあり、夜着、蒲団、薄縁、箆を笠にして逃ぐるもあり。凡て男女の隔てなく、親を見失ひ、子を知らずして、只我先にと押し合ひ、揉み合ひ行く様は、実に惨乱の極みなり」

軽井沢宿168戸のうち、壊家70戸、焼失51戸を数えた。噴出物の厚さは、2mにも達したという。

いっぽう、浅間山の北麓では、この日までわずかな降灰を見ただけであった。しかし、軽井沢宿に焼け石が降りそそいだ4日の夕方、北斜面には火砕流が流出していた。

「申の刻ごろ、浅間より少し押し出し、なぎの原へぬつと押しひろがり、二里四方斗り押しらし止る」

「浅間記」のこの記述は、火砕流が原野に押しひろがった情景を推測させる。

翌8月5日は、朝から噴火がいちだんと激しくなり、10時ごろには最高潮に達した。火炎と黒煙が交錯し、その中を火山雷の閃光が切り裂き、焼け石の降りしきるさまは、まるで無数の鳥の群舞を見るようであったという。

そのさなかに大災害が発生していたのである。

「八日の四つ時既に押出す浅間山煙り中に廿丈斗りの柱立たるごとくまっくろなるもの吹き出すと見るまもなく直に鎌原の方へぶつかへり鎌原より横へ三里余り押しひろがり……」（『浅間記』）

ふたたび火砕流が発生したのであった。火砕流は北斜面をなだれ落ち、中に含まれる無数の溶岩片の力で斜面を侵食し、高温の岩なだれとなって、北麓の鎌原村を直撃、たちまち村を呑みこんでしまった。村人の多くは避難することもかなわず、477人が犠牲になった。かろうじて村の一角にある観音堂の丘にかけ上がった93人だけが、一命を取り止めたという。

そのあと、山頂火口からは大量の溶岩が北斜面へ流出した。この溶岩流は、いま「鬼押し出し」と呼ばれ、観光名所になっている。溶岩を流出したあと、さしもの大噴火も沈静化へと向かった。

しかし、災害はこれで終わらなかった。

鎌原村を埋めた岩なだれは、ついに吾妻川の溪谷に達し、大量の川水と混じりあって、翌日、大洪水を発生させたのである。すさまじい奔流は、たちまち川沿いの村々を呑みこんでいった。人も牛馬も、家の建具も家財も、濁流にのって吾妻川を下り、利根川の本流へと入っていった。この洪水により、1300戸の家屋が流失、死者1000人あまりを数えたという。

このように、浅間山の天明大噴火は、火山がひとたび巨大噴火を引き起こしたときの自然の脅威を、今に伝えているのである。



軽井沢宿の混乱（『浅間山焼昇之記』）美斉津洋夫氏蔵／浅間園提供

中山道

怪状

常武

此分々三有危難
山井之親若何

